

105

769

明治四十三年十二月二十三日第三種郵便物認可
大正十一年十二月一日印刷
大正十一年十二月一日發行(每月一回一日發行)

自選

第十一號

第十二卷



始



特105
769

南無妙法蓮華經

聖語

三障四魔を申す障り

出来れば賢者は悦び愚

者は退くこれなり。

第十二卷

蓮日

第十一號

次 目

佛教々理概論(三).....	井村日成	2
凡夫の唱題.....	能仁事	7
大師號勅賜を祝ひ奉りて.....	一 記者	11
日容上人報恩法要.....	一 記者	13
世界漫遊旅行記(六).....	高橋卯三郎	15
童 謠.....	田久保しのぶ	21
中之町裏より.....	葉村青	22
教壇日誌.....	一 記者	32
編輯室より.....	陽	34

佛敎々理概論 [三]

僧 正 井 村 日 成

ほ、日蓮主義の實相論及緣起論

(註特に日蓮主義の語を用ひ日蓮宗と言はざる故は今日一宗派となりて『日蓮宗』なるもの存在するも、敎理失はれ迷信に流れたれば、こは云ふに足らず日蓮上人の主張の眞面目は『日蓮主義』と唱へらるゝ方に残り居るに依る)

日蓮主義の緣起論は佛界緣起論にして實相論とは界事常住論である。天台の一念三千は理論は極めて明晰なるも、已心を元とし陰妄の一念三千を説くが故に三千の理具(理論上具備しあること)をいふを説くも事具(事實上に具備しあること)を見る能はず。従て其修行は前述の如く哲學的にして宗教的色彩に反すれば、日蓮上人は之に満足せず。又華嚴、眞言の學説にも満足すること能はずして

舊到華嚴宗、浪影響之規模、新來眞言家、案筆受之相承

と喝破した日蓮上人の所説は天台の所説と議論の筋道は同一なれども其立論中心を異にせるものにして天台は陰妄の一念に立脚して一念三千を立てたるも日蓮は佛め一念を元として三千を立てたのである。

天台は華嚴經の『心佛及衆生是三無差別』の文に依り此の三者無差別なれば其何れを取るも議論は

成立するが、佛は高きに過ぎて手が届かず衆生は餘り廣きに過ぎて之を知ること能はず、故に最も手近なる已の心を觀せんに若かずとなして、禪定に入りて觀念觀法することを修行の中心とする。

日蓮は之に反し已の心は種々の迷に依りて誤りあるもので、此誤れる心を本として如何に觀念觀法するも結局正しき結論に達する筈はない。須らく正しき心を本として研究せざるべからずとなし佛の一念を根本として一念三千を立てた。

即ち天台の一念三千は凡夫の一念三千なるが故に理論上の具有に止まるも日蓮の一念三千は佛の一念三千なるが故に其三千は事實上に現はれて活動する。法華經壽量品には「或説已身或説他身或説己身或説他身或説已事或説他事」とあつて佛は或時は佛の身を或は示し或は説き或時は他の九界身を或は示し、或は説き、又或時は佛の活動を示し、或は他の九界の活動を示し給ふ故に、天台の一念三千は理の一念三千といひ、日蓮の一念三千は事の一念三千又は佛果起用の一念三千といふ。

眞言宗に於ては大日如來は宇宙全体なりといふも其活動を示すことがない。日蓮の一念三千に至りては佛の活動を示し、一心の場合に種々の相を現し種々の行を示して救濟活動を爲してあり、其實例は法華經普門品の觀世音菩薩が或時は全持となり、又は將軍僧侶等の三十三身を現して救濟の實際的活動を示せるが如きもので、其根本は前記壽量品の「六或」の法門に在る。

斯の如く佛の一念三千を立て佛を中心として宇宙を見るときは吾々の活動も其佛の活動の中に攝取包含せらるゝこととなり吾人も亦佛の活動の一分を負擔して活動してゐるものであるとの自覺が生來之を佛の方より見れば法華經譬喻品に説いてあるが如く

今此、三界、皆是吾子。其、中、衆生、皆是吾子。而、モ、今、此、處、多、諸、患、難。唯、我、一、人、能、爲、救、護。

となり茲に佛は吾人の主なり、師なり、親なり、この關係が明確となる。吾人は佛子なりとの自覺に達し、佛の人格を確認し其の偉大なる庇護と示教と慈悲の中に、安心立命するを得るに至り、茲に始めて本佛釋尊を中心とせる完全なる宗教となるのである。

更に譬諭を以て天台と日蓮との差異を説けば、天台は一念三千を貧女の寶藏の如しと説き、今は貧しき弱き者なるも實は寶藏の所有主である。唯だ迷の爲に此寶藏を開く鍵を失つたのであるから、藏を開くこと能はずして貧困に苦しんで居るが、一度覺の鍵を發見せば此の藏を開き大富者となるを得ると説き、此鍵を發見することを修行の眼目としてゐる。日蓮はこれに反して、佛は覺の鍵を以て藏を開き現に大富者である。而して吾人は此大富者の子にして其庇護と慈悲の裡に撫育せられつゝ其示教に依り修養を努め、終には父と同様なる徳を積み力を養ひ大富者となり得る確信の下に満足と幸福と感謝の生活を營むべきことを教へたもので、天台の貧女が終に鍵を發見すること能はず一生を困窮と不安と悲觀の裡に終るものと全く其趣を異にするものである。

斯の如く佛の一念を中心として森羅三千の現象の緣起を説く之を佛界緣起論といふ。

次に日蓮主義の實相論を説明せんに現象界は恰も海に波の絶ゆることなきが如く、三論宗に於て言ふが如き『純理無象』の『空』の世界は決して實現することあるべからず、現象個々を見るときは時に生滅出入あるが如くであるが、之を大觀するときは水の存する所必ず波あるが如く、本体と現象とは共に永遠の實在にして消滅することはない。

法華經壽量品には『我常住於此』といひ『我常在此不滅』と示し佛の不滅を説き、十界互具なるを以て佛が常住ならば他の九界も亦常住の實在ならざるべからずといふ。

日蓮上人は開目抄に於て

佛の實在現はるれば十界の實在も現はる是れ眞の一念三千也

と述べて居る。此説は華嚴眞言に於けるが如き後人の附會せるものにあらずして、本經たる法華經に佛自ら明示し給ふ所である。

斯如く現象は永遠不滅の實在であるを見るを日蓮主義の實相論となし、之を「十界事常住論」といふ。而して此十界事常住の宇宙の中に佛界緣起を信し、佛子的自覺に安住して生活の意義を認め活動の力を把握し、佛の心に一如する如き大理想の下に實生活を導く所に吾人の信仰は決定せられなければならないのである。

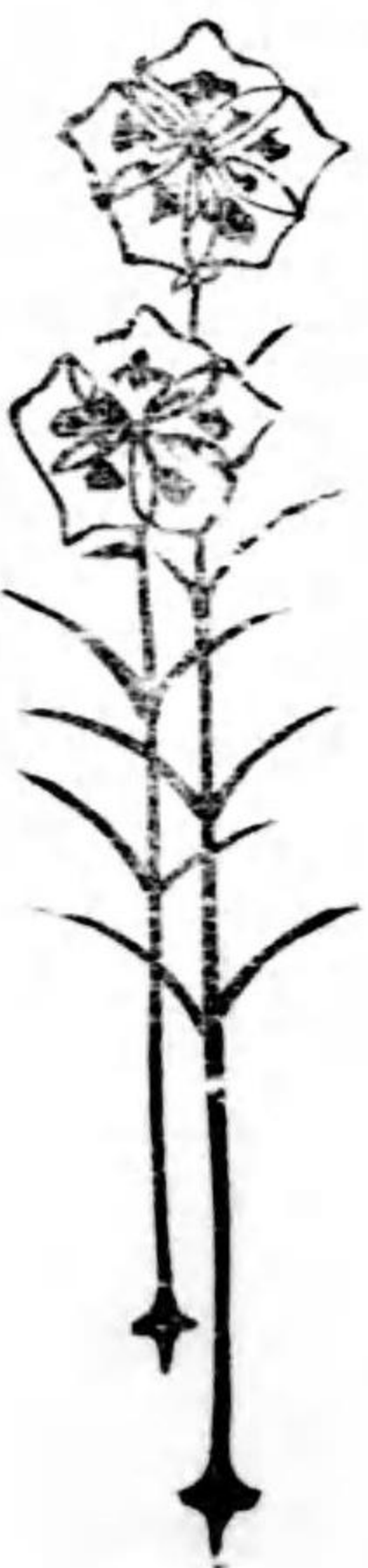
之を要するに日蓮上人に依りて法華經の眞髓を唱導せらるゝ以前に在りては未だ佛教の眞義は發揮せられず、眞の宗教は存在せざりしといふも過言はでない。天台の一念三千も眞言の毗盧遮那緣起も宗教としては共に失敗に歸したること前節に述べたる所の如く、佛教廣しと雖其眞義は法華經壽量品に於て本佛の實在と十界の常住を説かるゝに至り始めて現はれ來りたるものと謂ふべく、佛が法華經壽量品を説きたるは恰も龍を描きて之に點青せるが如きものにして壽量品なかりせば佛教は徒に洪濬錯雜にして捕捉し難く、信仰は四離滅裂にして統歸する所を失ふのである。日蓮上人が一切經の中に此の壽量品ましますは天に日月の山河に珠の人に魂のなからんが如しと賞歎せるもの誠に至言である。

予は身日蓮門下に在るの故を以て牽強附會敢て我田引水の説をなすものではない。是れ實に本經に明示する所にして佛教々理發達の歴史の立証する所、只本實の眞相を會員各位の前に披瀝して其賢明なる判断に委せしのみである。

佛教が其教理の發達に於て斯の如き經路を示したことは時代の影響に依ることも尠くない。即ち當時支那に於ては道教が盛んに行はれ哲學的に發進したが爲め佛教も之に對抗せんとして哲學的に發達したので一方宗教的方面に於ては却て退嬰墮落に陥つた。此狀を慨して淨土宗起り大に宗教的建設を試みたるも徒に感情に趨りて教理上の根據を失へる爲埋性的の人を救ふこと能はず、佛教をして極めて低級のものたらしめた。斯の如くして佛教は教理の方面に於ては徒に高遠なる理想を逐ふて全く哲學化し宗教としての生命を失ひ實行の方面に於ては低級なる迷信に陥り佛教を信する者は學者にあらすしては暗愚なる老婆なるの奇觀を呈するに至つた。

佛教々理の發達が時代の影響を受けたること右の如しと雖も佛教の斯の如き狀を呈せるは主として之を學ぶ者が佛教研究の網格を誤れるに依ること大なるは又た争ふべからざる事實であつて、即ち前々回『教法と理法』の條に於て述べたるが如く、教法に依りて理法を判することなす翳眼を以て理法を觀し之に依りて教法を判せんとせるの過失を犯し眞理の見方を誤れるが故である。吾人は宜しく明教の鏡に依り宇宙の眞理を正解し以て吾人の嚮ふ所を定めるべきである。

(完)



凡夫の唱題

主 幹 能 仁 事 一

日蓮主義者は研究も必要なり、鑽仰も大切ではあるが、信仰の顯れとしては、何よりも先づ唱題すべきであつて、唱題なくては眞に信仰の人となつたとは云ふことが出来ない。勿論同じく唱題すると云つても、天台、傳教の唱へられた様な題目とは異つて、法華壽量の本佛の是好良藥として留め置かせられた、大慈大悲の不思議力の功德が具つて居る題目でなければならぬのである。若し天台流の平等大慧の題目と同様に考へたならば、夫れは大きな間違ひであつて、即ち天台傳教の弘めのこしたる法は本門の題目である、日蓮聖人は明かに示されて居るではないか。

それであるから、同じ題目と云つても法華經の迹門の題目と本門の題目とがあることが信解せられねば日蓮大聖人の立教の祖旨に適ふものではない。吾等が唱ふる題目は本門壽量品に顯れたる御題目である、本門の題目であるのであつて、事實この位のことには知つて置かなければならぬことは當然である。

左様に信じてこそ、日蓮聖人の所謂正法正師の正義を信じた人と云はれるのである。

凡そ宗教の研究をするに就いては祈の人とならなければならぬものであつて、祈りを除いての研究は、鑽仰は鹽に鹹味を失ひ、人に魂無いと同様で、他人の寶を數へて居る痴漢の所業に等しいものである。本佛を意識したならば、——吾人の佛子たることを信じたならば娑婆即寂光の有難い意味合も自ら會得せられ、抑へても抑へ切れない祈りの音、唱への聲とならない筈はなかるべきであつて、今日の日蓮主義者の中には尊い祈りの形式を擱いて、理談にのみ流れるものが往々あることは誠に惜むべき事柄である。日蓮主義者の日常の行法に唱題の修業が缺けては功德の成就は覺かない。即ち入信の徴證は聖語にも『我等衆生行住臥に南無妙法蓮華經を唱ふべし』と示されて居る如く、此の題目は久遠實成の釋迦牟尼佛の御功德の結晶であるのだから、空しく宗義に囚はれ、理談に走つてはならない次第である。聖人は、題目は法華經の心なり』と仰せられてさへ居るよりしても本來此の題目に不思議な救ひの力があることが信じられない様では逆も法華の行人とは云はれないのである。即ち吾人の一心清淨一念無疑の信仰を以て唱ふる心に久遠本佛が宿らせ給ふ所の左様な尊い御題目を唱へながら、法華壽量の本尊を外にして如何様な理義を並べ、理屈を云はうとも、唱題するに何にでもかまはぬと云つて、動物に向つて迄も祈る様になるのは、抑も唱題の墮落であり、迷信の狂態である。

併せて、唱題行の肝要なことは既に述べた通りであるが、それでは其の題目を唱ふるに就て吾人の如き凡夫の穢れ多き心をもつて居るものと、聖人の如き淨き心をもつて居るものと、その功德に差異があるはしないかと云ふ疑ひが起るかも知れないが、それに就いては、日蓮聖人は信仰意識の根本に於て法華

の經意に背くことさへなければ、本來題目そのものに功德力が具はつて居るのであるから毫も差別はないと明かに仰せられて居る。譬へば良藥を服するに當つては賢愚の差別に依つて効能を異にすることがない様に、又人の利鈍に依つてその点す燈火の光明が闇を照らすに違ひのない様に、亦、馬鹿なものを持つて居る一錢銅貨でも、利口な人の手にある一錢銅貨と、その通用に於て何等變りはないと同様なわけである。但し、こゝに注意しなければならぬことは正信が基本とならなくては題目を唱へながらも現世安穩後生善處の利益は得られないと堅くいましめられて居ることである。

但し聖人の唱へさせ給ふ題目の功德と我等が唱へ申す題目の功德と何程の多少候べきやと云々、更に勝劣あるべからず候、其故は愚者の持たる金も智者の持たる金も、愚者燃せる火も智者の燃せる火も、其差別なき也、但し此經文の心に背て唱へば其差別あるべき也。(松野抄)

こゝに信仰の有難さが味はれ、宗教心の偉さが感じられるではないか。かくしては吾人の様な凡夫性の多い、聖人性の尠いものも日蓮聖人の御教へに依つて始めて轉迷開悟し離苦得樂の境地に進まれるのである。

近時は、行き詰つた時勢であるからと云へ、人間は詰らないものであるといふ弱者の叫びからして念佛を唱へよと説く親鸞主義が流行して居るが、左様な貧弱張りのものと、題目を唱ふる心と同一視する様なことがあつたら、誤れるも甚しきで、よしごの位詰らないものでも、又ごの位意氣地のないものでも、その本來には佛性が隠れて居り、光明が覆はれて居るのだから、その佛性光明を開き顯さうと

勵み努める、その當相が唱題行人の心裡であると心得ることが肝心である。雑念があつても朝夕唱題すれば自ら正念に住することが出来、迷ひの心の時でも唱題すれば任運に悟りに入ることが出来、又苦惱の人も唱題に依つて楽しい生涯を造ることが出来る。『妙法五字の光明に照らされて』こそ吾人の様な貪瞋痴慢疑に満ちて居る素凡夫も聽て唱題の功力によつて一分々々の完全生活を營み得るに到るものである。

袋きたなしとて金を捨つることなかれ、伊蘭をにくまば旃檀あるべからず、谷の池を不淨なりと嫌は蓮を取るべからず。』

重ねて云ふが、『此經文の心に背きて唱へば其差別あるべきなり』の聖語は誠に肝に銘すべきものであつて、題目そのものには行人の賢愚利鈍に對して何等利益の相異はないが、經文祖意に違つた時には忽ち利益を失ひ、謗法の罪科を犯すに到るもの、慎み畏るべき次第である。(完)



日蓮聖人大師號

勅賜を祝ひ奉りて

〓本行寺の奉祝講演會〓

維レ大正十一年十月十三日、朝廷吾祖ニ立正大師ノ勅號ヲ追諡シ給ヒ、乃チ其勅書ヲ賜フ。吾等此ノ聖旨ニ感激シテ、茲ニ恭シク欽戴ノ典ヲ行フ。

肅テ帷フニ、至真ハ元名ナシ但物ニ應ジテ稱ヲ立テ以テ其ノ用ヲ規ス。名分ノ誼乃チ斯ニ起ル。本化大聖一ヒ濁末ニ誕應シテ熾ニ別頭ノ教化ヲ振フ。三大秘法其旨遂ク五綱教判其義大ナリ。而シテ益ノ終窮ハ正シク閻浮統一皆歸妙法立正安國此土寂光ノ實現ニ在リ。其ノ規模ノ雄大固ヨリ尋常宗教者流ノ明リニ窺ヒ知ル所ニ非ズ。大聲俚耳ニ避ク、機緣又熟ヲ待ツ。綿々七百年、唯篤ク其深義ヲ鍛槌シテ以テ時ニ備フ。

干茲 明治大帝、屹トシテ中興開國ノ宗運ヲ啓キ皇祖ノ天業ヲ恢弘シ維新ノ雄國ヲ大成シテ四海一家ノ洪猷ヲ暢ブ。今上ノ代ニ迨テ世界ノ大勢猛然トシテ、戈ニ動キ、空前ノ慘禍ニ醒テ始メテ人類究竟ノ平和ヲ念フニ至ル。其聲急迫渴者ノ飯ヲ尋ネ、貧者ノ實ヲ求ムルニ似タリ。世道一匡人類覺醒ノ機、幾ド竹膜ヲ隔ツ。吾ハ絃一字ノ皇澤、慶暉養正ノ神謨ハ、久ク既ニ此時ヲ俟チ、吾究竟平和ノ至法、閻浮統一ノ名教ハ久ク既ニ此機ヲ窺フ。法化之ヲ識シ、國命之ヲ期ス。時國契合シ、機教相應ス。斯道豈鬱然興起セサランヤ。夫レ明治大帝承テ以テ天祖神勅ノ「就治」ヲ明ニス。緬カニ大聖陀ノ曾テ法ヲ付シテ「善治」ト讚スルニ符ス。今上天皇續デ以テ國祖聖語ノ「養正」ヲ大ニス。的シク本代大聖ノ曾テ佛囑ヲ揭テ「立正」ト呼ヒタルニ合ス。用ノ妙之ヲ治ト謂ヒ、體ノ妙、之ヲ正ト謂フ。正ナル哉正則チ是レ世出ノ冥契其撥ヲ一ニシ、時ニ應シテ實ヲ證シ、實ニ適テ名ヲ詮スル所以ナリ。呼々文應立正ノ妙名、令移シテ

天子ノ聲ヨリ出ヅ。勅賜ノ選號其義至レル哉。滅後六百四十年、大正ノ聖代ニ於テ、忽ニ此盛儀ニ遭フ。是レ日本國家カ叻メテ塔中別府ノ法華經ヲ公認セル最初ノ接觸ナリ。契フヘクシテ而シテ契ヒ 與ルヘクシテ而シテ與ル。能ク開國進取ノ運ニ乗ジテ、闊洋同歸ノ名教ヲ提起スヘキノ時ニ到ル。是豈四悉ノ妙化大ニ動カントシテ先ヅ世界悉檀ノ感應セルモノニ非スヤ。其レ次テ來ルベキハ社會問題ニ對スル人眼解決ナリ。其切要、究テ本化ノ攝理ニ存ス。是レ爲人悉檀ノ應化ナリ。今ヤ世界ヲ舉テ思想ノ粉糾ニ惱ム。夫レ克ク之ヲ良斷シテ轉邪歸正ノ的準ク與フヘキモノハ、獨リ法華開顯ノ勝能ナリ。是レ對治悉檀ノ當サニ發動スヘキ所、而シテ遂ニ能ク四海一法ニ入り、萬法一理ニ歸シ、人類各々其處ヲ得、萬彙各々其妙ヲ證シテ、娑婆即寂光ノ實現ヲ見ンハ、即チ是レ第一義悉檀妙益ノ大成ナ。感應ハ因縁ニヨリテ次第スト雖、妙氣初ヨリ宛然トシテ周足ス、四益内ニ融シテ機縁時ヲ邀フ。先ス端ヲ世界悉檀ノ感應ニ啓テ、斯

ニ妙化ノ大機動ヲ促スモノ歟。今此最大好縁ヲ序トシテ、次第廣宣化益室ルコトナリ。能ク祖道ヲ光闡シ、呈猷ヲ翼賛シテ速ニ法國冥合ノ本時ニ達センコトヲ期ス。奧ニ優渥ノ大恩ヲ欽銘シ、至誠報國ノ眞衷ヲ表明シテ佛祖昭鑑人天歡喜ノ下ニ恭ク勅賜ヲ拜戴シ奉ルト云フ。

大正十一年十月十三日

立正大師門下各宗管長代表

大僧正 本多日生 敬白

—以上東京上野に於て舉行せられたる立正大師賜戴式に朗讀せる大師號宣下欽戴疏—

十月十三日 朝廷より我宗祖日蓮聖人に對して立正大師の諡號を追賜せられたことは、我宗教界の一大盛事であらねばならぬ。

これを記念すべく顯本法華宗岡山教壇では管長本多日生親下を迎へて十月三十日午後七時より本行寺講堂に於て奉祝講演會を開いたが、信徒は固

より一般市民の來聽頗る多く、定刻前既に満堂、八百を超へ、孰れも『大師尊號勅賜に就て』と題する能仁僧正、『立正大師の高風』と題する本多大僧正の熱辯に感激し、最後に能仁僧正の發聲に、陛下の萬歳を三唱し盛會裡に散會した。

呈した。本多管長親下が報恩文を朗讀せられてより、能仁僧正の焼香、續いて各地信徒の焼香あり終つて能仁僧正は『日客上人の教化』と題し、本多大僧正は『立正大師號勅賜に就て』と題して講話があつた。

日客 報 恩 法 要
上 人

報 恩 文

十月二十九日日本行寺にて

日客上人三十三回忌正當の本年一月三十日發修法要が修せられたが、十月二十九日正午より本行寺本堂に於て來岡の本多管長親下を導師として同報恩法要が嚴修せられ、親しく日客上人に教化を受けし信徒を始め、津山の林伊平氏其他多數來會能仁僧正は固より姫路妙立寺の中川日史師、和氣本成寺の原田日勇師、津山本蓮寺の土屋信玄師等も列席せられ、會衆本堂に満ちていと壯嚴な觀を

伏惟 如來の出現は衆生をして善根功德を積ましめ以て常樂の大果に到らしむるにあり。廣く大藏經を闡みするに大涅槃經には五行を示す即ち聖行、天行、梵行、嬰兒行、病行なる。法華經には三軌を示す。即ち如來衣、如來座、如來室なり。又四法成就を示す。即ち諸佛に護念せられ諸の徳を植へ、正定衆に入り、一切衆生を救ふの心を發すなり。又華嚴經には百八人の善智識に因つて一々菩薩行を示し、守護經には菩薩の三十二種の行業と如來の三十二種の正覺の事業を明し、勝鬘經には十種の大願、三種

の大願を挙げ終りに攝受正法の一願に菩薩諸の一切の願行を統攝するを明す。吾祖日蓮大聖人即ち立正大師は廣宣流布の一願に諸願を統一し眞俗如意廣宣流布と修法言上の總願を定めたり之に由つて功德善根の第一には護法の淨業を取るべきは事頗る明白なり。

我恩師日容上人は學徳高邁にして末代希有の善智識たるのみならず、定に護法の大法將なり日容上人の時代は時恰も維新廢佛論の餘勢を受けて、佛法衰微の極に蹈り、宗内の綱記は亂れ教化の方針定まらず、信行の正軌依るべきなく全く法運地に落ちたるの時なり。此時に於て敢然起つて正法興立に任じ護法の大事に究碎せらる、其功績極めて分明なり。之が爲に顯本法華宗風は頓に擧り、教學各々興立し遂に日蓮主義の勃興を來たし、今日、今朝より吾祖に立正大師の稱號を勅賜せらるに至る。此法運開發の端を開きしは全く恩師日容上人孤軍奮闘の力なり其法勳功勞誰か感激せざらんや。不省日生今日在るが如きも一に恩師教養の賜なり。若し日生

が顯本法華宗に貢獻する所ありとせば其は全く恩師日容上人の賜なり。若し日生の法化によりて正信正解を得たる僧俗男女ありとせば、其法化の源は一に恩師日容上人教養賜なり。回顧すれば恩師の遷化より已に歲月を閉みすること三十三回、今日當寺に報恩法會を修さるに會し、感慨實に禁じ難きものあり。唯だ恩師に報ゆるの所以は恩師より教へられたる正法正義を捧持して之を宣傳廣布し、護法の大事に究碎し、更に大に法光を發揚するにあるか。冀くば恩師日容上人、我等法子の前途を冥護したまへ。

南無妙法蓮華經

大正十一年十月二十九日

於岡山本行寺

法弟大僧正日生

敬白



世界漫遊旅行記 [六]

林學士 高橋卯三郎

九、リオからブエノスへ

四月十八日 午後五時吾々の一行はアルゼンチン國ブエノスアイレス行き佛國船ヴァルデピアの客となつた、同船は一萬噸級の客船であるが一等は吾々一行を加へて僅に二十四人二等五十人三等や四等は何れも移民ごとに四等は伊太利の數百の移民である。一時間に十五哩の快速力、廣い散步甲板や大きな食堂や喫煙室がありカーゴボート

(荷船)のタコマ丸とは雲泥の差である。

夕刻六時リオを發した吾々は海上遺憾なくリオの夜景を眺めることが出來た。夜のリオの美觀は——人工美——イルミネーションにある。眞に美しいのはリオの夜景である。

リオからウルガワイ國首府モンテビデオ迄は海路千三十二哩である。十九、二十の二日間快速力で走り續けた我ウルデピアは廿一日早朝ラブラタ河口に達することが出來た。河口は幅數十哩濁

水濠々として盡きない、河口と云ふも宛然大海である。ロボス島を右に見河を通航すること数時間の後モンテヴィデオに寄港することが出来た。生憎夜二十時頃のことの上陸はしたもの、十分に見物の暇はなかつた。船は夜中の二十三時に出帆する。

モ市は人口四十萬、モンテヴィデオとは我山を見るとき云ふ意ださうだ。何んでも発見者が初めてモ市に近いセイラ山を見たので此の名を附したところである。モ市は海水浴場や政府公設の賭博場で名高い所である。

船は豫定の如くに出帆し相變らず濁水の上を這つて行く。亞國首府ブエノスアイレスに着いたのは翌朝十一時であつた。

一〇、ブエノスアイレス上陸、
— 中村公使

船が岸壁に着くや否や二人の日本人が吾々を迎ひに来て呉れた。公使館の福岡、永峰兩書記生である。兩氏の御影で荷物も無事に税關をパスし吾々は自働車でブラーサ、マジヨのアーベニダ、バラセ、ホテルに投ずることが出来た。早速に中食を濟ませ今後はベルグラノの中村公使の宅を訪問することにした。ベルグラノは住宅町として第一流である。中村公使の當時の話は大畧左の様に記憶して居る。

一、亞國に發展せんとするものは富者——相當の資本家でなければならぬこと。

一、南米發展はブラジルを中心とすべきこと。

一、ブエノスには三千人の日本人が居り或は市内にあり家内労働をなすもの或は獨立するもの或は床屋やコーヒー店を營むものがある。就中コーヒー店を營むものは相當に成功して居る。

一、當國に於ては相當の生活を營むには差支なきも生活程度が伯國に比して高いから伯國の如くには行かぬこと。

一、海外發展と國民教育の根本主義の變更
從來の日本の教育——忠君愛國主義——一、點張り——を變して海外發展的歸化的の教育すること要すとなし心持を廣くしてその土地の國民となるも日本人たることを忘れないと云ふ程度の教育を必要とする。余は當國に於ける日本人に歸化せよと云ふと多くの人は躊躇するのであるが如此有様ではイケナイ。

一、南米移住の奨勵
其方法としては
(イ)南米の航路補助をなし移民の賃銀を安くすること。

(ロ)移民局の設置をなすこと。
(ハ)大藏省に於て移民又は移民事業に低利資金

を觸通すること。

翌晩は公使から招待を受け永峰書記生の案内で夕刻公使邸に赴いた、尤もそれ迄市の大畧を見其地として有名なチャカリターや市營の海水浴場の視察をなした。吾々が公使官邸を訪れたのは七時頃のこと、暫くすると福岡書記生、荒井領事とが來られた。吾々一行の中本多博士と北村君とはアンデスを越えて智利の視察をなし他の三名は本市に止まつて研究することとしたが如何にせば最も有効であるかを研究するのが吾々の問題であつた。中村公使とは兎にも角にも翌日公使館で書記生や領事と相談せらるゝ方宜しからんとのことである。其夜は公使や公使夫人の待遇で久しぶりに日本食の馳走に舌鼓を打ち快談することが出来た。吾々は異郷にあり最も多年親しむたる日本料理あり日本酒あり剩へ流暢なる日本語の會話——酒酣なるや議論自出止まる所を知らざるの有様、誰れか

異國にあるの感があらうぞ、吾々は公使の好意を謝しホテルの人となつたのは十二時過ぎる頃であつた。

翌二十三日は領事館で智利行や市内視察の手順を打合せ研究。吾々はブエノスの其附近視察のため約半ヶ月を費やすこととし其日或者はラブラタに或者は智利に或者はマルデルプラータに或者はモンデウイデオに遠征を試みることとなつた。

一一、亞國の面積と人口、人種

亞國は十四州及十テリトリからなり南緯二十二度から五十六度西徑五十三度から七十四度の間になつて総面積は百〇八萬餘平方哩、佛、英、スコットランド、ウエールズ、アイルランド、イタリア、獨逸、瑞西等を引き去りたる外大英帝國、佛國、瑞西及伊國の面積の二倍を有して居る。千

九百十四年の國勢調査の結果によれば全人には七百八十八萬餘で内千分の五百三十一即ち四百二十三萬餘は男で千分の四百六十四即ち三百六十五萬餘が女であるから男子の過剰は正に五十六萬餘である。内アルゼンチン人五百五十二萬餘人、外人は二百三十六萬程で外人の内伊太利人最も多く西班牙人之に亞いて居る。

一二、言語人情宗教風俗等

伯國はブラジル語を國語とするに反し當國に於ては西班牙語を國語として居る。スペイン語の外姉妹關係あるフランス語やイタリア語等も大分通ずる様である。ことに社交會の上流婦人はフランス語に堪能である。

亞國は南米第一の白人國で一般に其祖先がラテン民族の血統をうけて居るから萬事フランスを以

て理想として居る。であるから一般に華美、豪華享樂の氣風に富んで居る。此國の祖先は黒人と淫することは好まなかつたと見へて伯國人の様に黒人の血を混することが殆んどない。従つて亞國には美人が多い。或る人が此國の美人を賞めて「色は極めて白く目は多くマリアの如く天を仰ぐ高貴を示し、バラ色の顔、蕾の如き唇、好んで黒色の帽子を日深に被り、黒衣を纏うて居るが之れが其顔色を極めてよく調和して居る。細過ぎず太過ぎざる脚に黒絹の靴下を穿ち高過ぎるかと思はる、カ、トの短靴をはきダンスに依つて訓練せられた歩調を有する、若き婦人の捨て難きは勿論なるも老いたるも亦極めて美はしい」と云ふたが敢て溢美の言ではない。

宗教は此國に於てはローマンカトリック教が盛である。某日曜日自分は視察の爲め當市の第一流の教會堂に行つて見た。教會は随分と大きなもの

であつたが集るものは割合に少かつた。何れか云へば今日に於ては昔の様には盛んではない當教會には當國獨立當時の偉人サン、マルチンの墓がある。

町の主道路はアベニダ、マジヨ、リバダビアフロリダ、カチャオの諸街である、我東京の銀座通りとも云ふべきフロリダ街に試みに夕刻歩を進めんが幾多の整裝した男女に依つて往來の人の波をなす様はリオのアベニダホテル附近と同様である。當街は午後四時から七時迄の間は、切車馬の往復を禁止専ら此等の人々の逍遙に委すのである。

南米の巴里の稱ある當市には幾多のカフェー店が軒を連ねて居る。然し吾人の注目を惹くものは廣き歩道に天蓋を設け店先きに椅子を並べてカフェーを喫することである。此邊は佛國巴里によく似て居るものがある。然して吞氣な國民は一杯の

コーヒーを呑むのに往來を眺めながら一時間も費すと云ふのであるから以て國民性の一般を窺ふに足るのである。

當國人の特長とする處は伯國人と同様に外人に對して非常に親切なことである。ことに人種の差別的觀念がないから南河の如き不愉快を感じることは更でない。(未完)

大正十一年

本誌月極補助金 領收謝告

- 岡山市 野上誠亮殿 金拾貳圓也
- 岡山市 板野常三郎殿 金七圓貳拾錢也
- 岡山市 坪田良造殿 金拾貳圓也
- 岡山市 須山茂三郎殿 金貳拾四圓也
- 岡山市 津島銀藏殿 金貳拾四圓也
- 岡山市 人見善四郎殿 金貳拾四圓也
- 岡山市 字垣卯三郎殿 金貳拾四圓也
- 岡山市 三田常次郎殿 金貳拾四圓也
- 岡山市 大熊虎太郎殿 金貳拾四圓也
- 岡山市 横山鉄太郎殿 金貳拾四圓也
- 岡山市 角南九八殿 金貳拾四圓也

社告

新年號廣告は左記へ十二月十五日迄に御申込下さい
岡山市下之町一番地
雜誌「日蓮」發送・會計部
角南九八宛

廣告料金

裏表紙	壹頁	貳拾圓也
全(見返シ)	全	拾五圓也
特別面	全	拾圓也
全	半頁	六圓也
全	四半頁	參圓五拾錢也
普通面	壹頁	八圓也
全	半頁	四圓五拾錢也
全	四半頁	貳圓五拾錢也
全	八半頁	壹圓五拾錢也
賀正欄	八半頁	壹圓也



東京 田久保しのぶ

網の魚

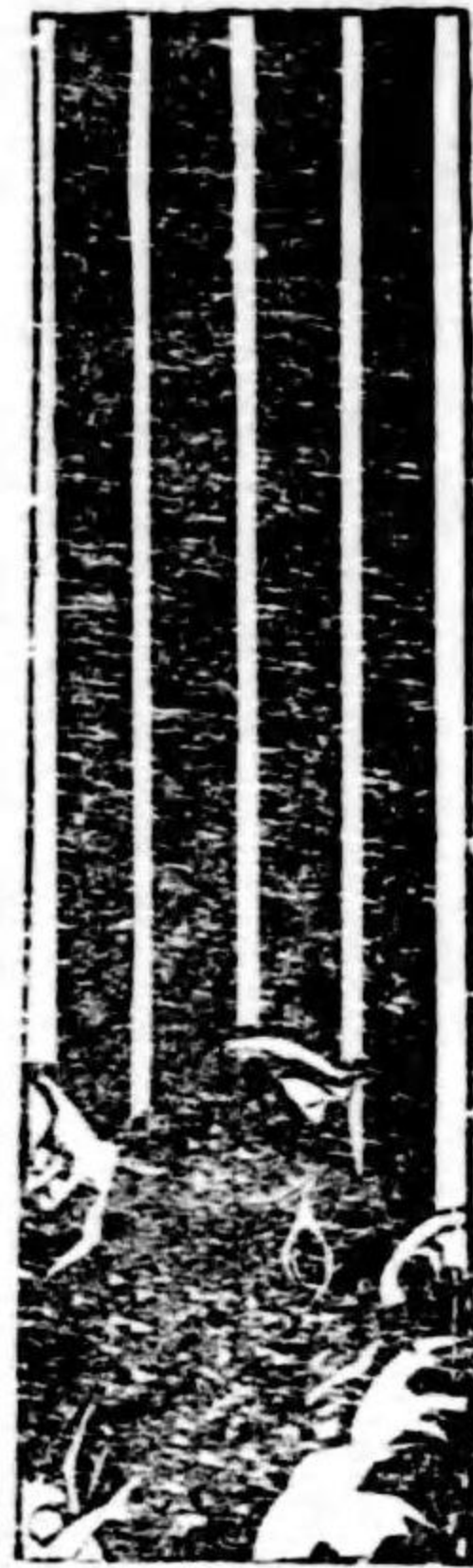
ピン／＼跳ねる
はね廻る
濱に上つた
網の魚
やがて死ぬのも
知らずでか

双手を舉げて
はね廻る

電信柱と小杉

電信柱の大入道
杉の芽ばねを見おろして
おれの方がお前より
背が高いと自慢すりや。
芽ばねの杉が云ふやうにや
枯れた大木何になる
私はまだ／＼背が伸びて
偉いものになります。

(以上)



中之町裏より

葉村青

當岡山に參り中之町裏なる茅屋に寓居を定めてより一ケ年有半、絶えず御厚志を辱うする各位に對して既に筆無精なりとの定評ある愚生のこと、は申し乍ら、餘り御無音に打過ぎ申譯の辭もなき折柄、本紙の餘白を頂戴致し、居常の些事より折に觸れての感想ごもたわいなく書き認めて聊か消息の一端ごも致し度く、筆執り申候。

小生先き頃或る事情の下に凡そ一ケ年間御厄介に相成候新聞社を退き、商の道に入り候もこの道

は小生の如きふしだらな者には不向き、且は算盤を撥く術は愚か帳面のつけ様ごも知らざる者のこと、至つて危きものに御座候得共、幸、長年商法致居候從弟が何かと面倒見て呉れ候まゝこの方面にて一奮發して見度く、親戚の營む商店卸部の店員格にてイロハより見習ひを始めた次第に御座候。これにて久しくふわつて居た小生の腰も坐らば誠に幸と存居候。抑も祿づつば書物も讀めぬ頃から何か書いて見度く名目のみ學校に通ふこととして、東京にて友人達と雜誌發行致したることなどが若氣の至りとは云へ身の程知らぬ所業にて、今更汗顔に堪はず、そのまゝに打棄てられたらば世の所謂文學青年ごとして、不良少年と撰ぶ所なき浮浪の徒ごもなり、我身を損ふこと固より他人様へ迄厄介相懸けし事ならんも幸、能仁御上人様始め皆様の御導きにて脱線を免れ、ごうやら真直に物を考へることが出来る様になり申候身の幸の程、思へばこれも佛の御加護、有難き因縁ご身に泌みて感じられ申候。

人間正直に働くことが何より肝心に候。『倦ます

撓まず努力を續くる時そは三重に私達に恵みを垂るべく、即ち努力奮闘は我々をして人間としての基礎的資格を得せしめ、又爲さるべからざる仕事をば必ず成就せしめ、剩へ、我々にして如何なる業務に従ふと雖も、若し眞に藝術家たらんことを願は、自ら藝術家の素質を我々の精神の中に宿らしむべし』と。右は中學時代學びし譯讀の一節にて、當時は色氣なき文章ごのみ厄介視したりしも、此程ふと讀み返して誠によき教訓と存候。

天才の天才たるは努力の伴ふに依る。『我が門家は夜は眠を斷ち晝は暇を止めて之を案せよ』と、又『火はをびたゞしき様なれごも暫くあればしめる、水はのろき様なれごも左右なく失ひ難し』等聖人の御教、それにつけても尊く候。水の心にて小生も及ばず乍ら日々の歩みを進め度く、流行を追ひて徒らに色彩を強め聲を高うして世の視聽を引かんこと、目下流行致し居候も、流行を追ふことは帽子屋が年々新しき品を賣らんとて季節毎に形、色合を變へる時、競つて新型を求めて得々たるもその實まんまと帽子製造家の術中に陥れるこ

と、同様、概してくだらなく候。眞面面に考へたる時のみ價値ある生活こそ我々は撰み度候。

今宵は本行寺講堂にて青年會の例會開かれ、能仁上人の『法華經要解』に就ての講義あり、それに先つて我々は只今顯本法華宗を奉ずれ共、それは眞に我々の願ふごころにあらず、此宗派が解散する日こそ待たるものなり。日蓮聖人が御教へは一宗一派の私すべきものにあらず、釋尊の大精神なれごも、誤り傳へられたるもの世に多く流布する故正道を示すべく假に顯本法華宗なる區割を作りたるものにてごこ迄も『たとへ日什が申せしことたりごも法華經及御妙判に違は、之を棄つべし』と御開山様のこの御精神に基くものなれば宗派の埒を徹して共に日蓮聖人が門葉として釋尊の元に膝づく日こそ望ましきもの、但し空しく統一呼ばはりして妥協をも敢てせんごとするが如きは必ず忌むべき由、堅く申聞かされ候。歸途寒風身にしみ、愈よ冬の來たごが感せられ候。既に青年會の席にても忘年會の相談あり、今年も残り少くなりしものかなと、そる月日の流れ早きご覺

わられ候。 □十一月十日□

お晝前頃本行寺に参り候處、御上人様はさる學校へ御講演に赴かれしことにて御不在、奥様は新座敷の床に菊を生け居られ、また臺所にては大きな釜の中に帶の如き昆布がよき匂ひ立て居候いづれも明日の御會式の御準備と察せられ申候。日曜日とて午後は室に閉ち籠り候に、硝子趣しに見ゆる裏の家の石榴の葉のこの間まではさ程とも思はれざりしに先日一雨あつてより夥しく黄ばみたるが、稍色づける静かな日影の中に一入鮮なるに、一片二片時折ひら／＼と屋根の上に舞ひ落つる様、晩秋の落葉たる天地の一角が殊更目の前に描き出されたる如く覺えられ候。郊外にては藁屋の上に差し翳されたる黒き枝に柿の實の四つ五つ残されたるが透明な空の下に赤しと見上げらる、頃ならん、子規が『枯枝に鳥のとまりけり秋の暮』の句の思はれ申候。

來信二通、共に句を添へられたり。

□十一月十二日□

咲よ菊つぼむな我は貧に處す(枕流)

誰がために咲くや黄菊の夜寒かな(弓場樺)
火どもし頃今日も裏にて子供がさらふ長唄の三味線の音の覺つかなく、秋の夕暮の感深く候。東京にては豆腐屋の喇叭の音身に染み、疲れた歩ぎりにて歸りゆく労働者の群の如何にもあはれに見送られ、自づと彼等が急ぐ家庭の燈火の色など想像せらる、時分なるべく、殊に、かゝる時夕餉の烟、澁團扇の慌しく鳴る勝手口の軒端にしばしたゆたひつゝ、忽ち風に吹き散らされて暮れ残る空に消ゆる様侘しくも亦興深く覺えられ候も、近年輕便なる瓦斯の煮炊流行するに連れて、さることも餘り氣附かずなりて、生活の簡便と、もに人生の興味も自ら薄らぎ行き申候。これに依つて見るに種々なる情趣と申すも、いづれも様々の勞苦骨折りの姿を客觀し、或は又同情する經過に於て生るゝもの、つとめて手を省き安逸を貪る生活には決して床しき情趣は伴ひ申さることを知り申候。

午後一時より本行寺にて御會式法要營まれ申候
お寺を辭して後、本日より岡山劇場にて興行致居候吉右衛門三津五郎一座の歌舞伎劇見物仕候。出し物は、一番目『平假名盛衰記』二番目『極附幡隨院長兵衛』と中幕に『連獅子』大喜利に『友奴』久々にてお江戸の芝居に接しい、心持致候。

□十月十三日□

用事ありて昨日姫路へ参り本日午後歸宅仕候。近頃とんと郊外へ出て見たこと無き爲、往復の車窓より眺めらるゝ晩秋の山野の光景、刈り乾し連ねられたる稻田のをちこちに農夫の働くさまなど珍らしく殊の外興を覺え申候。吉井川の流は瘠せて、青く澄んだ冷い水面に映する山々の紅葉も既に色褪せ、更けゆく秋はうつろひ行く午後の日差しと、ともに静寂に畫趣溢るゝものあり、曾て見し名家の筆の跡など自ら思ひ浮べられ申候。それに

つけても日本畫の獨特なる味ひ染々有難く御座候油繪具は色彩極めて豊富にして洋畫の手法は頗る自由に、その畫面は甚だ深刻なるべく、若し夫れミレーが作、例へば『晚鐘』にでも接するならば頭を垂れて佇む農夫の敬虔なる祈りの心持は固より、今しも夕べの帷の下りかけた廣野の一角から撞き出されたアンデラスの鐘の音の水の様な大空一面に漲りわたり、懸て夕映の色一際あかるき地平線の端にて消えゆく、その響きさへ畫面に躍動するを覺え候はんも、そは洋畫を産んだ所のその因縁ある風土の趣を表現する上に洋畫の手法が極めて適切なりといふだけのことにて、油絵のぐは固よりカンバスから其他一切の道具迄輸入しなければならぬ様な、つまり油繪といふものに因縁の至極淺き我國のその風景風俗を描寫する上に於て迄も洋畫なるものが効果あつて松風の音迄微妙に表現し得るかどうか、そこは頗る疑しきものに御座候。第一鐵道沿線の諸々に見らるゝ、『つちやたび』の廣告のペンキ塗りなるが爲、その周圍の林や丘の切角の眺めを傷つゝることが、一方そ

の廣告の精神たる餘りに露骨な山師的根性の純朴なる田園の氣風に對して不調和を極むると相俟つて、見るものをして甚しく嫌惡の情を起さしめ、『いくら足に穿くものだからといつてもあんな下劣な廣告をする様な商人ならどうせ碌な品物は製造しないだらう』と思はしめ、愚生をして向後如何なることあるも斷じて『つちやたび』は用ゐまじと決心せしむるが如きよ、して考ふるも、如何ほどペンキ塗りと我田園の風景との對照が不快なるか了解せらるべく、従つてペンキと同種類の油繪具が我田園の美を描くに相應しからざること察するに難かるまじく候。呵々。

さて姫路妙立寺はその周圍の土塀つゞきにて平安朝時代の町の有様を思はする様の町並と相應じて一入お寺らしき感じ深く、毎々床しく存居候もの、中川御上人様に面會致し種々御物語り伺ひ候うち、小生が支那雜貨の商を初め候ことよりして支那趣味の話となり、就いては實生活と趣味との關係を種々論議仕りなまいきにも小生御上人様の向を張つて愚見二つ三つ述べ申候。凡そ人間生活

の上に於て趣味と申すべきか、或は近代的に云はゞ藝術的感興とでも云ふべきか、兎に角さうしたものは絶対に必要と存せられ候も、人間教養の程度に依りて自らその高下あり、また思ひ／＼のまゝにその差異も見らるべし、日常生活のうちにも人と接する上に於て、己が趣味を他に強ひ他の趣味に無暗と同化されることは叶はぬ處、それがため、社交的の遺り口と己れが家庭の内の振舞とは自ら異にせざるべからず。出でては極めて一般的なるべく入つては大に個性の陶冶に努むべし、或はこれを二重生活と云はんも、此の意味の二重生活は誠に肝要のものにて、これを押し廣めて日本國家全体から申すとも國際的には近來洋式が基準なれば洋式で萬事やる必要なれども、國內にありては努めて日本人が個性に従つて日本獨特の文化を築くべし、決して日本婦人の特性を無視した洋服を強いて女學生の姿を看護婦以上に醜化するに當らず、しかも各國ともに他の美点を取りてこれを消化して己が特性を更に發揮すべきすがとすることは維新五ヶ條の御誓文の御趣意にも

ある通り、これを忽せにすべからざるも、空しく他に捉はれて己が特徴を忘れ、鵜の眞似をした鳥にも劣る失態を演せずとも、寧ろ鳥なればその濡羽の色澤を誇る如く、各その特色ある風俗習慣を養ひ、それ自身をして價値を高めなば世界的に人間生活の自ら整然たる複雑味を加へ、床しくも樂しき此の世となるべく、而して、各價値を高め美を發揚するには國土との調和に基礎を置かざるべからず、因縁なきことを強ひて爲さんとするものは罰當りなること、誠に心すべきなり等、例によりて聞き苦しきこと申述べたる次第に有之候。

今日はまたお紐落しの御祝の當日、曾ては七五三の祝にして男女三歳は髪置、男兒五歳は誇着、女兒七歳は帯解とて、嚴重な儀式が行はれ候由なるも近來は只宮詣りするのみとなり、東京にては神田明神などでんでに我子の裝を誇らし氣な親達が子供の手を引きて陸續參詣致し、賑しくも亦美々しき光景を呈し候處、當地にてはたゞ三歳の兒女が紐落しとてお詣りするのみ、親戚に三歳の男

兒あり、紋附の重ねを新調して本行寺へ參詣仕候近來兒童に洋服着せることが大に宣傳せられ、其影響にて洋服、それも節約勵行の折柄なればか安物ならまだよけれど、オーバーセーターのみにて間に合せて得々させる親多く、可愛想に子供は心ある人々の笑ひ物になり申候由、洋服の着せ様さへ辨へず、況や上下並に附屬品の取りそろへ方に於ては全々出鱈目な癖に洋服を着せるなど、併しそれは御勝手乍ら、我國固有の風習なるお祝に神佛へ參詣するに殊更鳥居とも山門ともさては御神體とも御本尊とも縁もゆかりもない洋服を着せないだつてよからうもの、あんな風なこととして子供を育てたならば切角成長した曉には社會主義者になつたり危険思想を振り撒いたりして、んだ親不幸者となりはしまいかなど餘計な心配をしたなど申していたく憤慨せし人有之候。成る程、斯る場合には男はな、こか羽二重、若し節約主義を勵行するならば黒木綿の紋附、女ならば縮緬の振袖でも用ふるが至當にて、柄にあてはまつた儂にやさしき身形をさせることこそ、間接には子女

をして知らず識らず國土を愛する念を養はしめ自ら忠良な國民となる基礎も出來申すべく、小生もその方に賛意を表すべく、こんな場合に迄洋服を着せる位なら、お祝を一ヶ月ほど延ばしてクリスマス、マスの當日教會へでも連れて行つたらよささうなものなご申し候。

從弟修養を兼ねて病氣靜養の目的にて午朝出發姫路中川御上人様の許に參り候爲、新米の商買人が師匠を失ひ小生の發動機に故障の起つた飛行機の感あり、心細さ云はん方なく候。併しこれから獨立自尊で大に働くべく決心仕候間御安心被下度候。

□十一月十六日

又今宵は本行寺に顯婦本婦人會例會あり、御婦人は暇なのか心懸けよきのか兎に角十日の青年會に比して集る方多く、賑に御座候ひき。能仁御上人様は蓄へることの大切なることに就きて御講話遊ばされ、人間は大に慾ばつて溜めることが大切なる由仰せられ候。但し金を溜めればそれでいゝといふケチな溜め方は不可、もつと徹底的に慾を出して善根を積み功德を納め、現世安穩後生善處を一心に願はねばならぬ、即ち正しき信心が肝心也とのこと、我等大に心すべきこと、有難く拜聴仕候。

□十一月十五日

東京にては目下アインシュタイン博士大持の趣、新聞にて承知仕候。從て曾て『デモクラシー』『サポタージュ』等の言葉が流行せし時の如く『相對性原理』なる語は定めし大道野師等の口にも上る程になり居候こと、推察仕候。しかし今日にては『デモクラシー』も『サポタージュ』も駄洒落に使はれる程の勢力なくなりたると同様『相對性原理』も亦瞬く間に忘れられることならん

と益もなきこと考へられ候。大事業は固より書物一冊を讀むに當つても其内容を相當に會得するにかなりの時間と努力を要すべきなれば、三日坊主では何事に於ても成功は期し難かるべし。況や流行につられて『相對性原理』なる言葉を駄洒落に迄用ゐて見度がつたとして、その一頁をも眞に理解しようともせず又、する間もない間に忘れて了ふ様な始末では、切角御本尊のアインシュタイン博士が來られて講演迄されたさて結局日本國中石原純博士を除いてはその學說をもにし得る人はなかるべく、萬事が此流儀なれば新時代の日本文化が常に上つらの模倣以上に出でざるも全く無理なしと、自國のことながらほどくあいそが附かし度くなり申候。三日坊主は日本人の個性の然らしむる所なり。而して個性固より尊重すべしと雖も、函詰にして藏の中へ仕舞つてばかり置いては寶物と雖も所持して却つて邪魔なばかり、個性もその陶冶につとめ磨きをかけざるべからず。三日坊主などいふ点は磨粉にて摺りて辛抱性の光を出さしむべきことが肝要なり。小生自身についても

常に其缺点を痛感致し己れ自ら己の身を叱り居申候。西洋の文物が頻々として入り來る様になりては殊に我國人は左顧右眄腰を落つける暇なきため考へて見れば維新此の方畏多き事乍ら教育勅語を除いては大々的に世界に誇り得る何物の完成をも見ず、一週間もすれば新築落成する様な西洋館に夜店で買つて來た椅子を並べて文化生活など納り返つて居る位が關の山に御座候。殊にマルコポーロがその東洋見聞録の中に世界の寶庫として『ジパング』を紹介してよりいまだに日本を見ざる西洋人等が日本文化に憧れて居たりするだけ西洋のまがひものだらけの文化を昇ぎ廻つて新時代だなど、得々たる者多きことを思ふにつけ冷汗背にあまねきを感じられ候。話はもとに戻り候もアインシュタイン博士上海に上陸せられ候折出迎の大坂毎日新聞記者に向つて『日本文化が歐洲の影響を受けずに獨立して發達してゐることは特に私が愉快とするところでありませう』と申され候由、新聞紙上にこれを見申候時には、博士が切角日本に上陸したはいゝが全く期待を裏ざられてがっかり

しなければよいがなご餘計な心配致候も幸本日東京の新聞を見し處明治座にて歌舞伎芝居を見物して『黙阿彌物の「黒子組曲輪の達引」二幕目江戸町三浦屋大真垣の場で、歌、羽、左、の三優が入神の妙技で大向ふを呻らせ、舞臺から花道から燦爛絢麗眼を奪ふばかりなので、博士が例の鳩のやうな瞳を瞠つたは兎も角夫人がすつかり喜んで了ひ、傍らの岡部子の肩をたいて英語で「オ、ゲエタイ〜」と感激した』とのこと先づ〜安堵仕候。而て當日の博士の感想は『日本の芝居は一の完成藝術だ道具の造り方にも一のスチルがある、衣裳の配色も何といひやうもない美しさだ引幕も美しい、そして舞臺裏の音楽が耳新しく面白、自分に何よりも面白いのは観客が俳優の藝を熱狂的に賞めることだ、こない、見物を有つ俳優は世にも幸福だ』とのこと、海上ビルデング、壯麗にして田舎者の目を驚かし、淺草のオペラが不良少年をして讚嘆の聲を惜まざらしむと雖も、歐羅巴の御客様から見れば安木節程も有がたかるまじく、矢張りお褒めにあづかるはいづれも

所謂文化生活の唱導者をして云はしむれば岡山劇場の御茶子のエブロンよりも更に無用の長物たる筈の日光の陽明門や能樂、歌舞伎等を措いて他になき事聊か皮肉なる事實にて且、他人の一寸は我一尺より見易いもの、日本文化を批評するには或る場合他人たる西洋人の方が適切なることを思はゞ上述の理屈もまん更小生の偏見でもあるまじと鳥評がましくも左様存せられ候。

偕て江戸文化の産物たるや、その中には往々にして修身教科書の趣意に反するもの有之候も、然も、吾人の愛惜措く能はざるものあるは三代將軍家光公が鎖國の命を出されたるお蔭にて西洋かぶれを免れて全く日本といふ空氣の中にて育てられ囚はれたる所なき純一な文化を完成し従て萬事藝術的なるに依るもの、而して川柳浮世繪歌舞伎劇等に到つては壯麗、典雅、深刻等の点に於ては歐洲の藝術に匹敵せざるべきも尙、獨特の價値に於て、實に寶物として命に代へても保存すべきものイブセンだあ、ショウだあとして隣りの子供の持つてる味も分らない菓子に涎れを流すのみ、而して

も忘るゝほどに御座候。 □十一月二十二日□

己が口に適し己が身の營養となる食物を己が畑に選ぶことを知らざる西洋かぶれの連中が歌舞伎劇の様なうすつべらなものなご、利いた風なことを云へばとて、その調子で押し通した日には日本は永遠に價値に於て歌舞伎劇以上の藝術を持ち得ざるべく、『温故知新』これいつの世とても忘るべからざる金言に御座候。 □十一月二十一日□

夕暮はたゞさへ殊に今日此頃には心せかるゝに空模様は俄に變りてポツリと來しと思ふ間なく、一陣の風に伴はれてざつとばかりに降り出で、時ならぬ雷鳴を聞き候ものから電燈はまだ点らず灰色に閉されし往來は、周章て、駆け出す男女、その間を縫ふてひたすら急ぐ自轉車等にて實に慌しき光景を呈し申候。昨日あたり十一月も末なれば此の寒さも當然のことならんなど申して火鉢に嚙り附きたるに今日は又陽氣が逆戻りして妙に薄あたゝかく、雨後の夜は全く空晴れたれど星影の昨夜程銳からざるを感じたわいなきこと書く間火鉢

本日は新嘗祭宮中神嘉殿に於て御祭典行はせらるゝ事と存候、起き出で、見れば、明け方近く降雨ありと覺しく地面も瓦屋根も黒くしめりて、裏の無花果の葉の色褪せて濡れ紙の如く、たわいなく首垂れたるに對して水手鉢の傍らなるハツ手はこれも早や葉の面著しく黒づめるにも拘らず、すつくりと潤へるその底には一際鮮かなる常盤の緑を藏して、いと誇らしげに頑丈な廣葉を張りその間より顔をのぞけた綿毛の玉の様な花の塊りにも爽かな氣持を感せられ申候。椽の日向に出で候に朝風肌を刺して清々しく、これからは寐間のぬくもりを他所に起き出でるは辛いこと乍ら、起きて見ると又別な感じに心牽かれ候。冬でも朝起きは心地よきものに御座候。冷雨忽ち來りて忽ち去り大方疎らになり畢せた裏の石榴の細枝を荒れ狂はせ、戸障子をゆすぐりて寒風は瞬く間に暗雲を吹きはらひ、のどかな日影の中に梢はなれた病葉の

舞ひきらめくもあはれに見遣られ、室内にては切
り炭の赤き肌と磁瓶の黒き光澤と、湯のたぎる音
との懐しき朝に御座候。併しいくらごたくを並べ
たどて際限なし、これより店へ出掛け申すべく候
□十一月二十三日□



教壇 日誌

十一月

●二日午後二時吉備真金村小學校講堂にて自厚會
法話△開會の辭(林校長)△和樂主義(能仁主幹)
●三日午後一時久米郡吉岡村大戸小學校講堂にて
青年團在郷聯合總會△開會の辭(杉本村長)△時
勢の察知力(能仁主幹)●四日午前十一時勝田郡
南和氣小學校講堂にて村婦人會講話△開會の辭(

中村孝利氏)△家庭中心の人(能仁主幹)●同日
午後七時より久米郡吉岡村にて久米嶺山講話△開
會の辭(杉本村長)△耐難の思想(能仁主幹)●
七日午後七時半より本行寺講堂にて清信會例會△
祖書講義(能仁主幹)●八日正午より岡山縣立一
中講堂にて講話△開會の辭(和田教頭)△我國の
經濟(大塚日銀支店長)△實力は修養より生る(能
仁主幹)●十日午後七時半より本行寺講堂にて
日蓮主義岡山青年會例會△法華經講義(能仁主幹)
●十一日正午より第六高等學校にて日蓮鑽仰會講
話△開會の辭(陶波正氏)△日蓮聖人の人身觀(能
仁主幹)△閉會の辭(志智左石六氏)●十二日
午後二時清輝小學校にて清輝實行團講話△開會の
辭(赤枝校長)△新愛國主義(能仁主幹)●同日
午後七時半本行寺講堂にて宗祖御會式逮夜構に説
教△御報恩の誠義(能仁主幹)●十三日正午より
本行寺本堂にて宗祖御會式正當會報恩法要營まれ
會集數百名にて頗る盛會修法後講話△宗祖最後の
嚴訓(能仁主幹)●十五日午後七時半より本行寺
講堂にて顯本婦人會例會△時機相應の信(能仁主

を磨け(能仁主幹)

幹)●十七日市内瓦町大森孫治氏邸にて同氏慈父
十三回忌法要後説教△功德第(能仁主幹)●二十
七日午後七時半より本行寺講堂にて篤信會公開講
演會△開會の辭(金事龍師)△闇の國より光の國
へ(矢部正師)△法華信仰の基準(能仁主幹)
●三十日鐘紡岡山絹糸工場にて講話△開會の辭(大
野主事)△眞生の喜悅(山本先生)△身心の鋪

□大正十二年一月元旦 午前九時本行寺本堂に於
て新年國禱會。
□四日 午後五時信徒新年宴會、當日は例年の通
り信徒餘興の催しあるべし。

△部數僅少に付至急申込まれ度し

「日蓮」第十二卷(大正十一年一ケ年分十一冊)合本豫約募集

△實價 參 圓

(内地送料共)

△申込所

岡山市下之町

雜誌「日蓮」發送會計部

電話 一八四番
撫替大阪六一九〇番
(振替名義 角南九八)



りよ室輯編

口愈々大正十一年の最後の編輯も終り、新年號の
 ことを考へねばならない時分となりました。
 口本年一月號より雜誌の形をかへましたが、非常
 に評判よく嬉しいこと、存じます。第十三巻よ
 りはごんな点に改良を加へようかと考へて居り
 ます。御意見もありましたら、是非御聞きかせ
 下さいまし。
 口何とぞ、本誌をして新しい年の奮闘と發展を期
 せしむべく、御援助下さる様豫め御願申して置
 きます。

一陽一

本講 部拾五錢 (送料一錢)
 誌讀 一ヶ年前金 壹圓八拾錢 (送料共)

【料告廣】
 一頁 普通面 八圓
 半頁 全 四圓半
 特別面 裏表紙其他御照會次第回答
 切 締 前
 日 月

大正十一年十二月一日印刷納本

發行兼編輯人

能仁事一

印刷所

岡山市山崎町七十六番地

印刷所

須山茂三郎

發行所

岡山市山崎町七十六番地

岡山市九龜町六十四番地

岡山市山崎町七十六番地 電話四三五番

購讀、廣告申込 取扱雜誌「日蓮」發送會計部

庶務、會計事務

角南九八

電話一八四番

振替名義 角南九八

支局

釜山府本町三丁目三〇四

雜誌「日蓮」朝鮮支局

矢頭伊吉

電話二三一

本多日生 下題文字
建部文學博士 序文
笠井北海道長官 序文

僧正 能仁事一著

法華經要解

紙數 四百頁
定價 金貳圓貳拾錢
送料拾貳錢滿鮮貳拾錢

最尊無上の經典として萬人に崇敬せられつゝある法華經は其旨義深遠にして多く識了に苦む。
 偶々講義あるも高尚に失して會得し難し。竝に日蓮主義通俗講演の大家たる能仁主幹深く之を
 憂ひて本書を編まる。懇切丁寧門外者と雖も一讀其意義を理解し得べく且つ専門家に取ても
 亦最良の指針ならむ。敢て一本を江湖の座右に薦む。

最寄書店に品切の

節は下記へ御一報

被下度早速御送附

申べく候

岡山市下之町壹番地

雜誌

「日蓮」發送會計部

電話一八四番

振替大阪六一九〇番

(振替名義 角南九八)

行發館文博京東

◎從來ノ御取引先ニ對シ謹ンテ厚ク御禮申上候尙不相變倍舊ノ御引立願上候
◎銀行一般ノ業務精々御便利ニ御取扱ヒ申上候間多少ニ不拘御用命奉願候

岡山市下之町



株式會社

第一合同銀行

取締役頭取

大原孫三郎

◎代理事務

岡山縣本金庫
岡山市公金取扱店
日本勸業銀行代理店
横濱正金銀行海外送金取扱店

電話

長 二二四番
一八四一〇番
一八四一〇番

明治四十三年十二月二十三日第三種郵便物認可
大正十一年十二月一日印刷納本
大正十一年十二月一日發行(毎月一回)日發行

日蓮十二月號 (定價拾五錢)

終